



はじめに

この夏、「エドゥケーターから学ぶフランス子ども家庭福祉」の5日間研修に参加した。そこで、放課後タイムの時間に「すみあそび」の体験会を開催できたこと、あらためて安發さん、そして対人援助学会の皆様との出会いに感謝している。本当に出会いによって生かされている。次から次へと起きていくこの連鎖に、自分自身の「在り方」もまた考えるきっかけとなった。

エドゥケーターの事例が示す「大人の在り方」

フランスでは、心理的社会的能力（compétences psychosociales）を義務教育に正式に取り入れた。感情を認知し、言語化する営み。そのためにまずは形にならない感情を表現することが重要であることを教育の中で伝えているというのだ。

「自分が身につけていないことは、子どもに伝えられない。」

スライドで紹介され、心に残ったのはいくつかあるが、最も響いた。これは単純だが、重みのある言葉だった。大人が自分の感情や弱さに気づけていなければ、子どもの繊細さや葛藤を肯定することはできない。かねがね伝えてきた、大人が自分の感受性を認めることが、対人援助の第一歩なのだということをあらためて確認できた。実際のところ、わたしが教員になってからも悉皆の研修といえば、技術的なものや知識理解の文脈が多く、ストレスケアや感情認知などの自己覚知を深める研修や機会はほとんどないか、個人に任せられている。また、感情についても学校では「感情をコントロールする」ということをトレーニングすることに重きを置きがちで、「安心して出す」ということを伝える機会が少ないのが日本かもしれない。

すみあそびの実践を通して

「すみあそび」も、そのひとつだなと感じた。今回、放課後タイムで体験の場を2日間開いた。「自由に」と言われて戸惑いつつも、紙の上になんかが姿を現す。書を通じて、感情あるいはそれ以前のものが外に出され、可視化され、認識される。実際にやってもらった感想は、以下の通り。「やっているうちに夢中になってきた」「なんでもいい、自由、と言われると戸惑う自分もいる」「カッコつけなきゃ、何かしなきゃと思っている自分が出てくる」「自由は意外と難しい」「子どもたちにとって書写で比べられる感覚はあまりいいものではないと気づいた」「みんな違うことをしているのは面白い。表現に評価してはならないと感じた」

この短い体験のなかでも、「感情に気づく」「自分の中の評価軸に気づく」「人と違っていいと実感する」といった心理的社会的能力につながる気づきが自然と生まれていたのは嬉しかった。書を通して大人自身が自分の感情や気分に触れやすくなる。この経験は、そのまま子どもや他者に関わるときの基盤になるのだと思う。

他者の表現を受け止める練習

書は、何かをうまく「表す」ための技術ではない。現象学的に言えば、それは「現れるもの」として立ち上がる。線の震え、掠れ、全ての特徴は、その人の呼吸や心の揺らぎそのものだ。意図せず現れてしまうものに、ただ立ち会う。それが書の本質だと思っている。すみあそびを通じて大人自身が「現れるもの」に気づくとき、他者との関わりにも同じ態度が持ち込まれる。子どもの言葉や沈黙、視線や仕草に「意味づけ」する前に、そのまま立ち会う。**自分勝手な解釈をしない**というその態度こそが援助においてもっとも必要な基盤であり、人権を尊重することには他ならないのだ。もちろん「もっとこう書きたい」というニーズは本人のみのものである。ところが、子どもたちがすみあそびをしていると、やはり「こうしたら?」「漢字書いたら?」などと余計なことを言う親もいる。何気ないと思われるこの行為自体も、「近親姦的関わり」として、本人に必要以上に介入しているという状況に近いような気がしてならない。しかし、回数を重ねるうちに、自然に「それもいいね」という態度に変化することが多い。つまり、「すみあそび」の現場で他者の表現を見続けることにより、いつしか柔軟になっていくこともある。

優先すべきは「わたし」のニーズ

「徹底的に自分自身を大事にする」ということが中心にあって初めて、他者理解は深まるのだということ。わがままであること自体を否定的に捉えがちであるが、「ニーズを叶える」ということは、「自分が社会を変えていけるのだ」と言う自信になる。日本の教育は「何かができるようになれば自信がついて、自己肯定感が上がる」などと捉え、発表の機会を与えたり、できることを増やそうとしたりしがちだ。しかし、それよりもまずは「君のニーズを満たすことが重要だ」と、世界に大切にされるという体験こそが、「わたしはここにいる」という肯定感になるのだと思う。そしてそれは、支援者こそが味わっておかなければならない感覚だと思う。

安心できるコミュニティの意味

現在、Art Play Worker養成講座が始まり、オンラインでのすみあそび実践が広がっている。画面越しに筆をとり、同じ時間を共にするだけで、不思議と「安心して感情を出せる場」ができていく。そこにはただ「そのままであること」が受け止められる。このような場を持つことは、大人にとって大きな意味を持つ。日々、子どもやクライアントの感情に寄り添う大人こそ、自分の内面を置ける場所が必要だからだ。繊細さを否定せずに「大丈夫だ」と確かめ合えるコミュニティがあることは、そのまま現場での安心につながっていくのではないかと信じている。

朱 紅 育 子 shukou icco (生涯発達支援塾TANE・書と生き方研究所代表)

宮城県在住、1979年生まれ。水瓶座。書家・美術家。認知発達の視点からアートと生き方を統合する「朱紅・書と生き方研究所」運営。既存の枠を外し続ける「フリーランス教育者」のオンラインサークル「はみだすラボ」を現在拡張中。Art Play Worker養成講座BASIC、12月からの1期生を募集中。

こころのたね



子どもたちの「いま」を知る

2025・教職員向け

・暴力の構図を読み解く

相談内容の中で恋愛相談も出てきました。当然最も重要な思春期の課題であり、この部分を体験することで、自己理解と他者理解が深まります。だからこそ、丁寧に話を聞くこと、冷やかしなどではなく真面目に恋愛について話せる環境があることは重要です。日々の会話の中に、暴力の「加害者」、「被害者」になる気配を読み解くことが重要です。

「パートナーシップ」とは決して我慢をし合うことではなく、「対等に伝え合える関係」です。昭和型の夫婦関係をまだ引きずっている家庭も多く、隠れDVに気がついていない生徒も多いです。先生方をお願いしたいのは、「大人なんてそういうものだ」ではなく、「健全な大人は言葉で自分の感情を説明できること」なのだということを、さまざまな機会に分かち合ってもらっています。

・生まれてきたことへの祝福を

「この世界に希望が持てない」という子がいました。親から否定され、大人に話を聞いてもらうことの少ない生徒たちにとって先生方と触れ合える機会の尊さ、そしてその時間の意味は深いなと思っております。日々の授業を通して、先生方が目指しているご自身の理想、世界観を、ぜひシェアしてあげてほしいなと思っています。生徒が本当に欲しいのは「単位」ではなくありのままを見てもらえる「安心」と「承認」かもしれません。

因果律を教えず、対話し続ける

人間の数だけ、思い込みがある、という世界で子どもたちは生きています。いや、大人もですね。できる限り冷静に、中庸で、バランスよくありたい、と思うわけですが、わたしたちはそもそも「自分の癖」があるのでそれは難しいのです。例えば「好み」「趣味」「特技」も違うわけです。当然、「習慣」も違います。

ほとんどの方が、「自分が正しい」という世界で生きているのですが、その正しさというのも思い込みです。もし「普通はこうだよ」と思うようなことがあったら、疑った方がいいのです。「自分の普通は本当か？」と。「みんなが言ってる」って、本当か？と。

「努力すれば報われる」でもなく「計画すればできる」でもないんです。「何のために」努力するのか、「何のために」計画するのか、そこにそれぞれの「価値観」「ニーズ」を聞き出すことで、「何をしたらいいか」が本人に見える、ということなのだと思います。

フランスでは「子どものニーズ」を徹底的に大事にしていることを、この夏、こども家庭福祉を学ぶ研修で聴いてきました。子どもがわたしたち大人から見たら疑問に思うような選択をしたとしても、まずはそのニーズを叶えることに「寄り添われる」という体験をさせる。それは、「社会に自分がいてもいいのだ」という安心感になるのだ、ということです。そして何よりエデュケーター自身が、常に自分の常識を疑い、チーム内で対話し続けているということでした。

詳しくは以下に掲載しているので関心がある方はぜひどうぞ！

[「エデュケーターから学んだこと①」](#)

[「エデュケーターから学んだこと②」](#)



育子のnote